

9月号

School Aid Japan Cambodia

スクール・エイド・ジャパン・カンボジア



Dream通信

2008. 9. No.6

子どもたちの初めての里帰り ～育ての親からの感謝の言葉～

「夢追う子どもたちの家」の子どもたちは、9月6日から11日までの4日間に生まれ育った故郷へ初めての帰省をしました。子どもたちの入園は2月5日から順次始まりました。子どもたちにとっては約7ヶ月ぶりに育ての親である祖父母や兄妹に会えるとあって、帰省の前日はとても興奮した様子でした。過去のDream通信でもお伝えいたしましたが、カンボジアの人たちは、クメール正月とお盆の時期を家族と過ごすことをとても大切にしています。今年のカンボジアのお盆は9月28日から9月30日までです。このお盆の週は園の子ども全員でお寺に参拝に出かける計画があり、また10月からは新学期が始まるため、9月の中旬に子どもたちの一時帰省を行いました。一時帰省の始まる前日に園から家族へのお土産としてタオルセットを配りました。また子どもたちが自ら園での生活や学校での勉強の様子を家族の方に説明できるように、簡単な写真集を1人ずつ渡しました。自分の勉強している姿や課外活動の様子の写真を見て、子どもたちは大喜びでした。出発当日は園に残る職員へ挨拶をした後、レンタルをした車やSAJ（スクール・エイド・ジャパン）の車に分かれて子どもたちはそれぞれの家に向かいました。久しぶりに故郷へ戻った子どもたちは、車を降りると駆け足で自分の家に向かい家族と再会をしました。ある家族は笑顔で、またある家族は涙で子どもたちの帰りを迎えてくれました。職員からは、園での生活の様子や学校の成績の状況などについて説明しました。子どもたちは早速園から持参した写真集を見せながら、一緒に生活している友だちのこと、園で英語や日本語を勉強していること、毎日食べているご飯のこと、連休中に出かけた遠足のことなどについて話しをしていました。その話を聞く育ての家族の方は、元気に生活をしている



準備も整い、それぞれの家に出発です。



駆け足で自分の家に向かう子どもたち。



育ててくれた叔母と涙の再会。



祖父に写真を見せて園の様子を説明。



園の友だちとも少しの間お別れです。



再び園に戻る日。家族全員で見送ります。



お兄さん、お姉さんと一緒に撮影。

様子に安心した表情を見せていました。子どもの叔母のスオン・スオさんは「子どもが家にいた時は貧しいために、勉強を続けさせることができないと思い、子どもの将来を心配していました。でも現在は園に入って勉強ができ、毎日学校にも通うことができます。私は子どもが勉強を続けることができるととても幸せです。」と話してくれました。8月から入園をした子どもは、入園してから日が浅いことから今回の一時帰省は見送りましたが、ほぼ全員の子どもの里帰りをした園では、普段の騒がしさが嘘のように静かになりました。4日間の滞在期間を経て、職員は再び子どもたちを迎えに各家庭を訪問しました。子どもたちは皆元気な様子で、荷物をまとめ家族と一緒に待っていました。育ての親の祖母、ワン・ニョオさんに帰省中の子どもの様子について話を聞いたところ「園の様子を子どもからいろいろ聞くことができました。園では勉強ができて、たくさんの友だちができたことも分かりました。保母職員の方もきちんとお世話をしてくれているので、安心して任せることができます。家の周りには農業と石を砕く仕事しかありません。子どもが家にいても十分な勉強ができません。子どもにはホームシックにならずに、これからも勉強を頑張してほしい。」また別の子どもの叔母のスン・プオンさんは「園に行ってから顔色も良くなり、表情がとても明るくなった。本人は将来医者になりたいと言っているので、勉強して自分の夢をかなえてほしい。そして社会に出た時に、たくましく生きていけるようになってほしい。」と話してくれました。帰省中の間に大きな怪我や病気もなく、全員が無事に園に戻ってくる事ができました。今度は家での様子を子どもたちに尋ねたところ、家の仕事を手伝っていた子、近所の友だちや兄妹と遊んでいた子、家族でお寺に行った子と思いきいに過ごした様子でした。また「4日間だけでなく、もう少し家にいたかった。」という意見や「家にいてもすることがなく、早く園に戻って友だちと一緒にまた勉強したかった。」などの感想もありました。子どもによって感じたことは様々ですが、今回の帰省は良いリフレッシュになったようです。次は来年4月のクメール正月前に一時帰省を計画しています。立派に成長した子どもの姿を家族の方に再び報告できるように、職員一同園の運営に取り組んでいきたいと思っています。